

称号及び氏名	博士（人間科学） 松岡（井下） 継実
学位授与の日付	2020年3月31日
論文名	ジョルジュ・サンドにおける自己形成の理想 ——『モープラ』、『ナノン』を中心に——
論文審査委員	主査 村田 京子
	副査 大平 桂一
	副査 田間 泰子
	副査 高岡 尚子（奈良女子大学大学院人文科学系教授）

## 論文要旨

本論文は、19世紀フランスの女性作家ジョルジュ・サンド（1804-76）の数ある作品のうち『モープラ（*Mauprat*）』（1837）、『ナノン（*Nanon*）』（1872）を中心に提起し、人物像やその変容を当時の社会情勢や歴史との関連において自己形成のあり方を分析するものである。それを通して、サンドの自己形成の理想を見る。

分析対象として挙げる二つの小説は、ともにフランス革命前後を物語の舞台とし、時代の変化とともに登場人物も変貌する「教養小説（*Bildungsroman*）」の性質を持つ。主人公の男女の結婚が描かれるという点でも共通し、結婚に至るまでには数多くの困難を経なければならぬ。『モープラ』では貴族同士の結婚が描かれるのに対し、『ナノン』においては、貴族の息子と農民の娘との異身分婚が描かれている。一方、この二つの小説には35年の隔りがある。『モープラ』は、サンドの比較的初期の作品で、『ナノン』はサンドの最後の長編小説である。二つの小説を比較することにより、サンドにおいて、どのような変化があったか——あるいはなかったか——を読み取ることが可能になる。とりわけ、『モープラ』で描かれずに『ナノン』に描き出されていることを浮き彫りにすること、そして両作品に通底する自己形成のテーマ、およびサンドの理想とする自己形成のあり方を読み取ることが本論文の主要な目的である。本論文は2部5章構成である。

**第1部、第1章『モープラ』における〈劇場性〉**。本章では、『モープラ』のテキスト自体に〈劇場性〉が織り込まれていることに着目して、主人公ベルナルの自己形成の過程を分析した。彼の成長の段階ごとに「幕（*rideau*）」という語が登場することに注目し、「見世物／光景（*spectacle*）」がいつの間にか観客を渦のように巻き込み、その劇中の一員とし

て包摂していく過程を辿った。主に「教育」および「訴訟」の場面における〈劇場性〉の分析をふまえて主題との連関を明らかにした。ベルナールの行動領域と認識領域は段階を追って広がり、その度に新たな世界の枠に包摂される。こうした過程を経て、ベルナールは領域を広げ、成長していく。法廷の場面でベルナールは、自らを監視する全てのまなざしを見返しているが、その描写からは、〈見る／見られる〉という眼差しの対峙こそが、さらなる解放へと彼を導き、最終的に他者の眼差しに影響されない主体性、自らの眼差しの獲得を可能にするということが看取できる。「死の法廷」が変貌し祝祭空間で終わる終結部は、フランス革命における「連盟祭」と密接に関わるものであり、サンドは〈劇場性〉を通して物語空間を「歴史」とを巧妙につなげている。サンドは大衆に人気のあるメロドラマの要素を援用して読者を惹きつけながら、自らの信条、思想を巧みに組み込んでいることがわかる。

**第1部、第2章『モープラ』に見る自律的個人の理想。**本章では、『モープラ』の主人公の一人であるエドメに焦点を絞り、ルソーの『エミール』(1762)におけるソフィーとの比較により、彼女の人物像と作品における役割を探った。『エミール』では完成された絶対的存在が教育者として想定されているが、『モープラ』においては〈エドメ／ベルナール〉の力関係は固定化されていない。さらには、言葉の獲得というベルナールの試練と同様に、失語症に陥ったエドメが言葉を再び獲得するという試練も描かれる。その過程を分析することで、サンドが、性別を問わずに「個人」として平等に生きられる「社会の完成」をも射程に入れていることを明らかにした。執筆当時、不幸な結婚を経て別居訴訟のなかにあったサンドは、精神的な同志となりうる伴侶の姿、それと同時に理想的な自己のあり方——自律的個人——を描き出していた。

**第1部、第3章『モープラ』における〈民衆の言葉〉。**本章では、他の章で取り上げる中心人物とはやや異質な人物であるパシアンズに注目した。無学な状態に留まりながらもエドメやベルナールの「自己形成」を助ける重要な立場にあり、初期の構想では主人公でもあった。パシアンズの「未開の叡智」に着目し、彼が演説家でありながら「未開の言葉」を語るという点、さらに「真実の言葉」の効用を浮き彫りにした。パシアンズは靈感に満ちた言葉を語り、フランス革命が起こり平等な社会が実現することを周囲の人物に予言する。彼は下層階級に属するが、自分の言葉の影響力によって、貴族を民衆に結びつけることができた。このように〈言葉〉という視点で『モープラ』を読み直すことで、〈特権を潔く放棄し民衆側の立場に立つ貴族ベルナールの物語〉と、〈貴族と民衆とをつなぐ存在である民衆パシアンズの物語〉という、作品全体の諸要素と有機的につながる二つの物語の存在を明らかにした。1789年のフランス革命前の状況を描く『モープラ』は、1848年の二月革命に向かっていく執筆当時の状況と重なる。「言葉の力」、とりわけ文明化されない〈民衆の言葉〉を信じ、作家としての使命を意識しつつ、平等な社会の実現を待ち望むサンドの姿が読み取れた。

**第2部、第1章『ナノン』における女性の自己形成。**本章では、農民の少女ナノンが

主に独学によって知識を獲得し、革命後に貴族の青年と結婚するという一人の女性の自己形成の過程を辿った。『モープラ』に登場する貴族の娘エドメとは違い、ナノンは無学ではあるが、革命の波に翻弄されつつも果敢に自分の使命を果たしていく。ナノンの特徴は旺盛な知識欲であり、自分が学んだことを教える力も持っている。「例外的な女性」であるナノンは、「自ら学ぶ力」を持ち、自らの才知で社会的上昇を実現できた。その基盤となったのは、大叔父の深い愛情によって培われた「自尊心 (amour-propre)」である。ナノンは成功して裕福な地主になるが、自己利益の追求よりも他者への配慮を優先する。ジェンダーから解放された女性像としてナノンが描かれている重要性も論じた。

**第2部、第2章『ナノン』における男性の自己形成**。本章では、ナノンの成長と並行して劇的に変貌するエミリアンの人物像を中心に分析した。エミリアンの人物像とその自己形成を分析するにあたって、とりわけ男性性に注目し、ナノンとの出会いや相互の影響関係を考慮に入れながら、彼の意志や意欲がいかんして生じるのかを辿った。19世紀ヨーロッパにおける「男らしさ (virilité)」は、「力強さと徳の理想、自信と成熟、確信と支配力」を表し「偉大さ、優越性、名誉、徳としての力、自己制御、犠牲的行為の感覚」、「自己犠牲」、「勇気」、「英雄主義」によって定義づけられる (コルバン)。エミリアンについていえば、力強さや支配力、優越性などは見られず、理想の「男らしさ」の典型とは異なっている。一方で、「対抗的タイプ」(モッセ)の属性である「柔弱さ」はエミリアンには見られない。彼は祖国のために命がけで戦う勇敢さを持ち合わせている。このように、19世紀当時の「男らしさ」の理想をある面では共有しつつも逸脱しているエミリアンを通して、サンドは新たな「男らしさ」を描き出している。さらに、エミリアンはサンドにとって理想的な男性像であると同時に、理想的な社会のあり方へとつながる象徴的存在であることを明らかにした。

以上の考察の結果を通して、本論で扱ったサンドの描く人物像は一貫して〈自立〉した存在を目指して変貌を遂げること、さらに、それは相互の対等な「教育」によって可能になることが明らかとなった。自らの意志で何に頼るかを決定し、それを信じて尽力する主人公らの言動は「自己改善能力 (perfectibilité)」を信じるサンドの思想と大きく重なる。また、主人公らは二元論に囚われない「中間者的な存在」であるという特徴を共有しており、それによって架橋としての役割を果たす。貴族の父と民衆の母との間に生まれ、階級や宗教やジェンダーなどの二元論に囚われない自由な生き方を求めたサンドの理想をそこに見ることができる。

『モープラ』で描いたようなフランス革命期を舞台とした政治や歴史、教育などの主題について、サンドは第二帝政 (1852~1870年)の弾圧のころは書くことを避けていた。『ナノン』において、彼女は再び同じテーマのために筆を執ったのだ。一方、二つの小説を比較することにより、サンドにおける変化も見て取れる。まず、『モープラ』では、主人公たちは貴族であり、貴族同士の結婚が描かれていたのに対し、『ナノン』では農民の娘が主人公となっており、貴族の次男エミリアンとの異身分婚が成立している。貴族の父と民衆の

母との間に生まれ、階級や宗教やジェンダーなどの二元論に囚われない自由な生き方を求めたサンドの理想をそこに見ることができる。また、『ナノン』ではより新しい〈女性／男性〉像が描き出されている。『モープラ』執筆後から35年を経てサンドが描いた人物像は、現代の多様な〈女性性／男性性〉をも先取りするかのような新しさを持つ。

さらに、「女が書く」物語を書く、という点についても、変化が見られる。男（ベルナール）の視点で描かれる『モープラ』に対し、『ナノン』では、女（ナノン）の視点で物語が展開する。しかも「女が、書く」物語となっている。19世紀当時、男のものとされた「言葉」、「知識」を自ら求め、獲得したナノンは、最後には「書く行為（écriture）」を手中に収めたのである。『ナノン』は、特権階級の「貴族の、男が、語る」という『モープラ』から35年後に生まれた、「民衆の、女が、書く」物語である。サンド自身が自伝『我が生涯の記』を著したように、自伝を書くナノンという登場人物を造形している事実には、より大きな意味が見出せる。35年の歳月を経て、女性作家として確固たる地位を築き上げたサンドの自負を見出すこともできよう。

## 〔初出一覧〕

### 第1部

第1章：「『モープラ』における〈劇場性〉」、『人間社会学研究集録』第12号（大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科）、pp.23-48、2017年、【査読有】。

第2章：「ジョルジュ・サンド『モープラ』に見る〈自律的個人〉の理想——女主人公エドメの人物像から——」、『女性学研究』第26号（大阪府立大学女性学研究センター）、pp.83-108、2019年、【査読有】。

第3章：「〈言葉〉の物語としての『モープラ』——パシアンスを中心に——」、『人間社会学研究集録』第11号（大阪府立大学大学院人間社会学研究科）pp.73-100、2016年、【査読有】。

### 第2部

第1章：書き下ろし。

第2章：「ジョルジュ・サンド『ナノン』における男性性の表象」『関西フランス語フランス文学』第25号（日本フランス語フランス文学会関西支部）、pp.29-39、2019年【査読有】。

## 学位論文審査結果の要旨

学位申請論文：松岡（井下）継実著「ジョルジュ・サンドにおける自己形成の理想——『モープラ』、『ナノン』を中心に——」について、本学位論文審査委員会は、人間社会学研究科人間科学専攻の博士論文基準に照らして厳正な審査を行い、以下の評価と結論に至った。

### 1) 研究テーマが絞り込まれている。

本論文は、19世紀フランスの女性作家ジョルジュ・サンドの作品（『モープラ』、『ナノン』）を取り上げ、それぞれ「教養小説」とみなして、男女の主人公の自己形成の過程を歴史的背景も考慮に入れながら丹念に辿り、その分析を通じて作者サンドの自己形成の理想を明らかにしている。その内容は、サンド作品における「自己形成」のあり方に焦点化している。

### 2) 論文の方法論が明確である。

本論文は、主に二つの観点から作品分析を行っている。一つは「教養小説」の観点から「教育」（言葉・知識の獲得、相互教育、自ら学ぶ力など）を中心に、歴史の転換点（フランス革命／二月革命／普仏戦争後のパリ・コミュン）と関連させながら、男女双方の「自己形成」のあり方を探っている。もう一つはジェンダーの視点から、19世紀当時の女子教育に焦点を当て、ルソーの『エミール』における女子教育と対比させながら、「自立した個人」の確立をサンドが目指していることを明らかにしている。また、男の人物像に関しては、19世紀当時の「男らしさ」の範疇と照らし合わせながら、新しい男性像を抽出している。このように、文学的・歴史的・ジェンダー的視点を統合した作品分析は効果的なものである。よって、本論文の方法論は明確であると言える。

### 3) 研究テーマについての先行研究の調査を十分に行っている。

本論文では、『モープラ』、『ナノン』についての先行研究（Simone Bernard-Griffiths, Nigel Harkness, Michèle Hecquet, Françoise Massardier-Kenney, Nicole Mozet, Nancy Rogers など）の他に、ジェンダー研究（アラン・コルバン、ジョージ・モッセなど）、サンドと関連のある思想家（ジャン＝ジャック・ルソー、ジュール・ミシュレ、アレクシス・ド・トクヴィルなど）、歴史研究（ジャン・カスー、ルイ・シュヴァリエ、モナ・オズーフ、ミシェル・ペローなど）の文献にもあたり、こうした先行研究を十分踏まえた上で、これまであまり論じられてこなかった視点から作品分析を展開している。

### 4) 研究の素材となる基本文献、資料、調査データを十分に吟味している。

本論文で分析の対象となるサンドの小説や自伝、手紙などのフランス語テキストを丁寧に読み込み、語彙に関しては、ラルースの『19世紀大辞典』にあたるなど、19世紀フランス文学研究に必須の基本文献、資料に基づいて考察を行っている。また、ルソーやミシュレなどサンドに影響を与えた思想家の文献も原典にあたり、詳細な検証を行っている。したがって、研究の素材となる基本文献、資料の十分な吟味については、申し分ないものである。

## 5) 研究テーマについて、先行研究にはない新しい知見を打ち出している。

第1に、『モープラ』に関しては、男の主人公が「獣」の状態から「言葉」や「知識」を獲得し、その行動領域および認識領域を広げることで成長していく過程を〈劇場性〉を手掛かりにして分析している。また、完璧な教育者に見えた女主人公が「言葉」を喪失し、再び取り戻していく中で、自律的個人として自らを再構築していく過程を辿っている。さらに、物語の背景となる革命前夜のフランスにおいて、「真実の言葉」を述べる下層階級の哲学者に注目し、彼を貴族（二人の主人公）と民衆をつなぐ存在とみなしている。このように、『モープラ』の作品全体を「言葉の物語」として捉え、男女双方の「自己形成」のあり方を検証する本論文は、先行研究にはない新しい視角に基づいている。

第2に、異身分差婚を扱った『ナノン』に関しては、女主人公（農民の少女）が当時のジェンダー規範を超越した例外的存在（旺盛な知識欲、行動力、論理力、経済的な才能の発揮）であることを明らかにした。男の主人公（貴族の少年）に関しては、19世紀当時の「男らしさ」の要件を一部満たしながら、女性的要素も併せ持ち、「男性性」「女性性」を調和的に内包する男性であるとみなし、それが、サンドが最終的に行きついた理想の男性像であると結論づけている。このように、二人の主人公を階級、ジェンダーの二元論を超越した存在とみなし、そこにサンドの理想とする「自己形成」のあり方を見出している点に、本論文の新しい視点が見出せる。

第3に、執筆時期において35年の隔たりのある二つの作品を比較検討することで、貴族の男が語る物語から、民衆の女が書く物語に変容していることにその違いを見出している点でも、新しい知見を打ち出したと言える。

## 6) その知見を裏付けるための、必要にして十分な議論と実証が展開されている。

本論文は、サンドの作品や伝記的要素に関する先行研究、および歴史的資料の検討を詳細に行いながら、具体的に、フランス語テキストの語彙を取り上げて、その意味を丁寧に分析することで自らの論考を裏付けている。それによって、説得力のある実証と議論を展開している。

## 7) 当該分野の研究領域に新たな地平を切り開く、独創性を備えた論文である。

「5) 先行研究にはない新しい知見」の項において言及したように、ジョルジュ・サンドの作品研究において、「自己形成」に焦点を絞り、ジェンダーの視点から鋭い分析を行っている点に本論文の独創性が見出せる。さらに物語の中で描かれるフランス革命の状況を、小説執筆時の時代状況（2月革命前／パリ・コミュン直後）と結びつけ、男の暴力に代わって「他者への配慮」と「自律性」を併せ持つ女性の力によって、理想の社会を築くことができるというサンドの考えを浮き彫りにした点で、サンド研究において新たな地平を切り開く、独創性を備えた論文と言える。

以上の評価を踏まえ、本学位論文審査委員会は全員が一致して、本論文を博士（人間科学）の学位に値するものと判断した。